

闇に葬られた「新生児取り違え事件」 厚労省をダシにした「順天堂大学」隠ぺいの証拠

デイリー新潮 2018年04月27日08時02分



取り違え被害者の痛切な訴えを無視し、ダンマリを決め込む順天堂。多少綻んでも隠ぺいを貫くつもりか。だが、姑息で不誠実すぎる「ウソ」が明らかになった。「厚労省に報告する」ことをダシに被害者を丸め込み、その実、なんら報告していなかったのである。

学校法人順天堂のホームページには、その校名についてこう書かれている。

〈中国の古典「易経」にある「順天応人」(天の意志に順い、人々の期待に応える)と、孟子の言葉の「順天者存 逆天者亡」(自然の摂理に順うものは存続して栄え、天の理法に逆らうものは亡びる)に由来します〉

つまりは順天堂は腹を決めたということか。本誌(「週刊新潮」)が2週にわたって報じた小林義之さん(51)＝仮名＝の新生児取り違え事件に関し、こうも堂々と〈天の理法に逆らう〉姿勢を見せられると、もはや〈亡びる〉覚悟を決めたとも考えないかぎり、説明がつかない。

1967年1月半ば生まれの小林さんが、取り違えの事実を突きつけられたのは、2015年の年末だった。母親から「血がつながっていない可能性」を告げられ、DNA鑑定の結果は親子の確率「0%」。翌年1月、小林さんは自分が生まれた順天堂大学医学部附属順天堂医院に出向いて事実を伝え、3月から話し合いが始まったという。

ところが、順天堂は「どうやら事実」と認めながらも、「取り違えの相手方の平穏な暮らしを壊してはいけない」と強弁し、「本当の親に会いたい」という小林さんの切なる願いを退け、端から金銭での解決を提案してきた。16年末、不本意ながら話はまとまりかけたが、明けて17年、順天堂側の弁護士が代わって積み上げた話も反故にされ、疲弊した小林さんは押し切られてサインしたというのだ。

〈お知らせ〉と同時に恫喝

むろん、小林さんは少しも納得していない。ところが、順天堂は4月6日、ホームページに発表した〈お知らせ〉に、被害者にはすでに〈お詫びをし、解決に向けて、弁護士等の意見を踏まえ話し合いを行ない、ご了解して頂くことに至りました〉と、独りよがりの結論を記載。もう片方の相手については〈現在の平穏な生活を乱し、取り返しのつかないことになるのではないかと考え、お知らせしないことといたしました〉と、どんな権利があつてか、放置を宣言したのである。

〈天の理法に逆らう〉とはこのことだが、順天堂は45年前にも、〈天〉を愚弄していた。小林さんが自分たち夫婦から生まれえない血液型だと知り、「取り違え」の可能性を訴えた母親を、冷たく追い返していたのだ。

結果、小林さんは「不倫の子」だと疑われて両親は離婚。継父に虐げられ、何度も自殺を考え、高校にも行かせてもらえず、母親も心を病んだ。ところが、そもそも取り違えたことについても、そのために不幸を招いたことに対しても、順天堂は小林さんに頭すら下げなかったという。

もはや〈天の理法〉など屁でもないのだろう。その証拠に、順天堂は〈お知らせ〉では低姿勢を装いつつも、同時に弁護士から小林さんに宛てて、〈貴殿らに守秘義務違反があつた場合には、しるべき対応を取る所存です〉と、恫喝する文書まで送っていたのだ。

だが、順天堂が実は「逆天堂」であつたという証拠は、それに止まらない。小林さんが1年にわたって順天堂側と交渉した記録を精査すると、底の浅いウソで糊塗した悪質な隠ぺいのあとが明らかになった。

“厚労省には医療事故として…”

加藤勝信厚生労働相が閣議後の記者会見で、この取り違え事件に触れたのは4月13日のことだつた。順天堂医院から11日、51年前の取り違えについて関東信越厚生局を通じて報告があつたと語つたのだが、これに憤慨したのは小林さんである。

「すると、話し合いの際に私が順天堂側から聞かされてきた話は、真つ赤なウソだつたのですね。私は順天堂から、厚労省にちゃんと報告するのだから、取り違えを公表しなくても隠ぺいにはならないと説得されたのです」

小林さんは順天堂側との交渉を録音していた。それを聞かせてもらおうと、たしかに16年7月4日、順天堂医院内で行われた話し合いで、順天堂の医師が小林さんにこう話している。

「厚労省にはやはり医療事故として届けるべきであろうと。(中略)ちゃんと報告しておくことによって“隠れて私たちがやっているわけではないんだ”ということをごすね、“公にはしないけれども、

隠れてやっているわけじゃないんだ”ということを、私たちも立場をそう取りたいな、ということで話が出ました。(中略)医政局の事務次(ママ)官に報告することによって、“聞いていました”と。そうすることによって“外に大きく出ないということは保証する”と。“その代わり報告はしてください”と、そういうことが出ましたので、一応、そういうほうで私たちは動くんですけど」

少し解説が必要だろう。要は順天堂は、取り違えの事実を厚労省医政局に報告する、と小林さんに伝えているのだ。内々に厚労省に打診すると、必ずしも公にしなくてよいが、必ず報告するように求められた。だから報告するので、われわれは被害者と「隠れて」交渉していることにはならず、順天堂が事実を隠ぺいしているという指弾は当たらない——。小林さんをそう論難しているのだ。

「隠ぺいでもなんでもない」

同じ日、同じ医師は小林さんにこうも話している。

「私たちはやることはちゃんとやったんだし、隠ぺいでもなんでもないと。ちゃんと国の機関にも報告していると、っていうことがあるので、あとでマスコミがどんなに来たって、私たちはやることはちゃんとやったという、ひとつの保証として厚労省を挙げています。ですので、それは報告します」

本当の親にどうしても会いたいと訴え、事実の“隠ぺい”に反対し続ける小林さんを説き伏せる材料として、順天堂は厚労省への報告を、いわば錦の御旗として掲げたのである。

数カ月が経過し、12月9日の話し合いでも、同じ医師がこう語っている。

「“採血を始めなさい”と。で、その採血の結果が実際に動くゴーサインになりますので“それをしなさい”と。それから、採血の結果が出たら、いただいたあれ通りに出ると思う、出るんですけど、“その結果が出た時点で厚労省と東京都にはちゃんと報告しなさい”と。ということですね」

もう一方の相手に取り違えの事実を伝えることを拒み、金銭での解決を狙う順天堂は、和解の条件のひとつとしてDNA検査のための採血を求めた。そして検査結果が出たら厚労省にも東京都にも報告すると、小林さんに明言したわけだ。

ところが、先述のように、順天堂から厚労省への報告が今年11日にあったとは、どういうことか。

順天堂の回答は…

関東信越厚生局医療課に尋ねると、

「順天堂医院から取り違えの報告を受けたのは、4月11日が初めてで、それ以前にはありません。報告を受け、その日のうちに厚労省に伝えました」

厚労省医政局も、

「順天堂医院の新生児の取り違え事案について、4月11日以前には、病院からの報告は一切ありません」

では、東京都はどうか。

「順天堂からは今月に入って連絡を受けましたが、それ以前にはまったく受けていません」(福祉保健局)

順天堂は金銭を支払う代わりに、人権を侵害された小林さんの手足を縛り、取り違えの事実を口外することも、本当の親を探すことも禁じてしまった。

追いつめられ、疲弊した結果とはいえ、和解に同意した小林さんは分が悪いという見方もある。だが、小林さんを説き伏せる決め手が、厚労省や東京都に報告するという“虚偽”だったのだから恐ろしい。順天堂、いな逆天堂の手口は、詐欺師のそれと同じ。今回も順天堂は、

「ホームページに掲載した以外については、当法人として回答は差し控えさせていただきます」

と、人を喰ったような回答を寄こすのみだった。

「週刊新潮」2018年4月26日号 掲載